

仏慧明浄日ぶつてみやうじょうにち 仏慧、明浄なること日のごとくにて、

除世痴闇冥 世の痴闇冥を除く。

『訳』「仏の智慧の光明が明らかに輝いていること、あたかも太陽のそれのごとくであり、この世の人びとの無知の闇を除く」

(以下 宮城顛『宮城顛選集』の要約)

### 1 世の痴闇冥を除く

「世」は迷える流転の世界。仏慧はその迷いの世界、苦悩の世界においてはたらき、愚痴無明の闇を除く。

聖道自力の道・・・出世間道であり出家の道

願生浄土の道・・・在家の道、人間として生活の現実に立ちか

えつたものの歩む道。

### 2 人間の本当の現実を表わす言葉「凡小、群萌」

「凡小、群萌」と言うのは世にあるものと言う意味。

聖道門の人々・・・頭で大乘を求めた。

浄土門の人々・・・生活の事実で大乘を求めた。

諸仏はすべて項背の光輪をそなえている。円光は人の修諸功德の果としてその身にそなわったものである限りどこまでもそ

の個人徳を表わす。

### 3 回向に二義

第一義・・・因を回らして果に向かう自力の回向。

第二義・・・回思、思とは自力の思い自力を回らして他力本願

の大道に向かう回思回向道。回思回向道とは、思は思慮しりょ分別、私のはからいを捨てて公明正大せいだいな大道に向かうこと。

・諸仏の項背日光はもろもろの徳をおさめその徳が成就した者の相。

・私の光明であり項背に日光ありと雖もぐちの為に闇まされていくという「有国土」の相。

・人々の項背には円光があるのだが無知の愚かさのために闇まされている。

・日光が項背や背中を照らしても人々の愚痴の闇を晴らすことは出来ない。

我が国土の所有光明

・光明が仏事を為すのであり功德は仏法の事業である。浄土という事業を実現しているのが光であり、智慧のはたらきである。

・安楽浄土の光明は阿弥陀如来の智慧のはたらきから現れ世間の煩惱の黒闇を除くことが出来る。

### 4 智と恵

智・・・後得清浄世間智（衆生済度のために世間にはたらく智慧）

恵（慧）・・・根本無分別智（自らに空無我の理をあきらかに生きる智慧）

仏恵明浄日・・・恵の成就を意味する

除世智闇冥・・・智のはたらき

## 5 摂取の光明

・光明に照らされるのは一切衆生であり、光明に摂取されるということは、仏心の光明の血となり肉となりそのエネルギーとなること。

・常行大悲の益ということは、常に大悲が行ぜられていく身になること。

・私の生活の一切において大悲が確かめられ、生かされていくという大悲の主とならしめられるものが摂取ということ。

・常に大悲を行ずるものとして生み出されていくということが私のうえにおこる。

・安楽浄土の光明は如来の智慧より生起するのだから、維摩経にいわれている仏土があつて光明によって衆生利益の事業をなす、だから仏恵明浄となること日のごとく世の痴闇冥を除くといわれている。

（以上要約）

## 感想

・自分が救われるということは時代が救われ、社会が救われるという原理が私の上に明らかになった時しか救われない。

・愚者という身の事実になって往生するということも限りなく聞くといいところに立ち帰らされるといいこと。

・仏教が無明痴闇冥といわれているのは、心を閉じているところに闇がある、心を閉じさせる一番根本にあるものは自己固執であり自分の思いや体験を絶対正しいものとして生きていく私の心の問題である。

・仏法によってあきらかにされた真理を、いかに我が身のうえに実現するかということを学ばせて頂きました。

梵声悟深遠 微妙聞十方

梵声の悟り、深遠にして 微妙なり、十方に聞こゆ

現代語訳

この二句は莊嚴妙声功德成就と名づける。

仏はもと、どうしてこの願いを興されたかというのと、ある国土を見られるに、善い法があつても、その名声は遠くまでとどかない。名声があつて遠くにとどいたとしてもまた微妙でない。名声がありしかも遠くに及んだとしても、衆生を悟らせることができない。だからこの莊嚴をおこされたのである。

インドでは浄らかな行を梵行といい、妙なる辞を梵言という。彼の国では梵天を貴び尊重するから、多くの場合梵ということばを讃めことばとするのである。またインドの法は梵天と通じているからであるともいわれる。

声とは名ということである。名とは安樂浄土の名をいう。

經（大經）にいわれている。「もし人がただ安樂浄土の名を聞いて往生したいと願ひさえすれば、願ひのとおりになる」と。これは名（浄土の名）が衆生を悟らせるということの証である。

釈論（智度論）にいわれている。「このような浄土は三界につつまいられるものではない。どうしてそういえるかといえれば、

浄土は欲がないから欲界でない。地に居住するから色界でない。色があるから無色界でない。およそ浄土は菩薩独自の業によつて建立されたものにほかならない」と。

有を超えて、しかも有のすがたをとっているのを微という。名がよく悟りを開かしめることを妙という。

だから「梵声の悟り深遠にして微妙なり、十方に聞こゆ」といわれているのである。

（以上『解説浄土論註』より）

諸師のいただきをまとめたもの（以下引用）

①「莊嚴」とは、仏性本来の性質が発揮され浄土と娑婆が相照らしあつて新たな世界を創造することを言う。虚と実のごとく、娑婆を娑婆と知らしめて浄土があり、浄土を浄土と願ひしめて娑婆がある。浄土があるゆえに私たちは苦悩の現実に生きる意味があるのであり、苦悩の現実があるゆえに浄土の存在意義がある。

浄土を観察する際は迷いの三界や煩惱を離れた清浄な環境を観ることが前提であり「絶えず如来回向の無上菩提心を背景に持つ」ことが肝要となる。

②「妙声」はじっくり観察すべき浄土の徳目。名が仏にとつても衆生にとつても国土にとつても非常に重要な要素であること

が領解できれば、称名念仏が「もろもろの善法を摂し、もろもろの徳本を具せり。極速円満す、真如一実の功德宝海」の大道であるいわれが明確に読み取れる。

③「功德」は「徳のはたらき」。仏とは「自覚覚他・覚行円満」といわれるように、みずから智慧を得、他に智慧を得さしめ、自利利他の行が円熟して徳を身につけた人のことを称するのですから、仏徳のはたらきは特に迷いの衆生にとっては重要な要素となる。智慧があっても徳がない人は、いくら良い提案をしても周囲は同意しません。私たちは山のような浄土の善徳・土徳によって仏縁につながることができたのです。

阿弥陀の徳は浄土の徳となつてはじめて一切衆生に届くことができる。国王の徳は国全体の信頼となつてはじめて全世界に轟くことと同じである。

そしてこの仏や浄土の徳が現実に私の元に届けられるには、「徳」が「妙声」となっていなければなりません。名声とならねば広く衆生に浄土の徳を知らしめることは適わず、土徳を生んだ智慧もはたらきをうしないます。どんなに素晴らしい製品を造っても、どんなに素晴らしい教育を施しても、その内容が名声となつて世界を駆け巡らなければまだ本物ではなく、影響は限定的であることと同じです。ですから名が大事。名前が内容

を表し、その内容が力量を發揮する中で、相対的には、「名声」となっていくのです。

ですから、大経・重誓偈には「名声十方に超えん」とあります。阿弥陀仏にとっては浄土の名声こそが最後の仕上げであり、衆生にとっては浄土の名声こそが仏縁のはじまりです。

名号を称えることは仏の功德をたたえることですから、この功德をたたえるためには、名号に仕上がった経緯を聞く必要が出てきます。これこそが經典の「御はからい」でしょう。

(以上引用)

### 感想

聖典に親しむ会の勉強会に参加させて頂いて、私一人では読む気にもならない浄土論註の解説書を皆さんと読ませて頂き感想などお聞きし、とても良い時間を賜りました。御礼申し上げます。浄土論、浄土論註の構成なども教えていただき、読み進めていくうちに、気が付くと何処にいるのか分からなくなったりもしましたが、曇鸞大師のご意思を感じられる箇所に出会ったのも嬉しいことでした。

名の中にすべてがある、南無阿弥陀仏の生起本末を聞いていくのが聞法であると教えられてきました。私たちは霞を食べて生きていくわけでも、空想の中で生活しているわけでもなく、宿業や社会と交わりつつ、しかもそれに染まらず帰依するところを持ちながら生活したいのです。理想論や机上の空論でなく

私自身が足元から立ち上がることができる国土を起こされた内容  
容を聞いていきたいと思います。

一つの言葉に限りない広さを感じながら、頭の中を仏様の世界からの言葉と自分の方向からの言葉が交錯する時間でもありました。有難うございました。

## 書き下し文

「正覺阿彌陀 法王善住持」(正覺の阿彌陀法王、善く住持したまえり、と。)此の二句は莊嚴主功德成就と名づく。

佛本何が故ぞ此の願いを興したもう。

有る國土を見そなわすに、羅刹を君と爲せば、則ち戀土相噉す。

寶輪殿に駐まれば則ち四域 虜なし。

之を風の靡くに譬う。

豈に本なからんや。

是の故に願いを興したまえり。願わくは我が國土には常に法王有して、法王の善力の住持する所ならん、と。

住持とは、黄鵠の子安を持ってば、千齡更りて起こり、

魚母の子を念持すれば衆をへて壞れざるが如し。

安樂國は正覺の為に善く其の國を持てり。

豈正覺の事にあらざること有らんや。

是の故に「正覺阿彌陀 法王善住持」と言えり。

## 現代語訳

安樂國は、正覺の阿彌陀法王によって、よく住持されている。

この二句は、「莊嚴主功德成就」と名付ける。

仏は因位のと看何故この願をおこされたのか。

羅刹という悪鬼を君主とする国では国じゅうでお互い争い合っている。

ところが転輪王の宝輪が宮殿にとどまると、四方の世界みな心配がなくなる。まるで風(君主)によって(民衆が)なびくようである。どうして君主が国の根本でないことがあるのか。

であるから法蔵菩薩は願いをおこされた。「願わくば、我が國土には常に法王がましまして、法王の功德の力によって住持されるように」と。

住持とは、たとえば鶴が墓で恩人子安の名を呼び続けたので千年の寿命がよみがえった。魚の母が、産んだ子(卵)のことを思い続けられ、溜まり水が冬枯れても死滅しないようなものである。

安樂國は阿彌陀の正覺によって、よくその國をたもたれている。どうして正覺と関係ないものが存在しようか。(安樂國の隅々まで全てが正覺の徳を表現しているのだ。)

この故に、「正覺の阿彌陀法王によって、よく住持されている」と言うのである。

**考察1** なぜ、国土莊嚴で主功德が説かれているのか。

「いまは依報の莊嚴を説く処なれども、浄土を住持したもう主莊嚴を挙げて所住持の国の勝れたることをあらわすゆえ主功德と名づくるなり」（香月院『註論講苑』）

「国土というものはそれを統治するもの、その中心にあるもの如何によって大きく左右される。簡単にいいますと、その世界はどういう人によって、どのように治められているのかということ問うているのが、主功德成就です。ですから、仏そのものを問題にするというよりも、仏というものを通して国土を表すということに、力点があるわけです」（取意）（宮城顛『宮城顛選集』）

**考察2** 「住持」について

「住持」：住は不異不滅に名づく、持は不散不失に名づく。（下巻）とどまりたもつこと。念じたもつこと。世にとどまり教えをたもつこと。（『真宗新辞典』）

『論註』はじめにも、「仏力住持してすなわち大乘正定の聚に入る」とあるように、天親菩薩は阿弥陀仏のはたらしき全体を「住持」と表現している。

後の不虛作住持功德の箇所で、「住持の義は上のごとし」とあるが、その「上」とは、この主功德の文である。不虛作住持功德は、

「仏の本願力を観ずるに、遇うて空しく過ぐる者なし よく速やかに功德の大宝海を満足せしむ」であり、本願力との出遇いが示されている箇所である。その、出遇った本願力の具体的姿が、この主功德の箇所で、衆生を念じ続ける姿として示されているとかがえる。また、さらにさかのぼると、性功德（正道の大慈悲たる出世の善根）と重なってくるだろう。阿弥陀の大慈悲が浄土をたもち、それによって衆生の不虛作をたもつのである。

**考察3** 住持のさらなる意味（鶴のたとえ）

「この千齡というのは、鶴の寿命を表すわけです。つまり、子安のことを思い続けて、その結果自分の身にそなえている寿命の全体を子安に与えるという。ですから、住持するということは、仏がその身にそなえている徳の全体を衆生に与えるという意味が出てくるかと思えます。仏の住持とは、仏がその身に成就している徳の全体を、衆生に回向成就することです。」（取意）（宮城顛『同上』）

宮城氏は、「他者を念じる」ことの極まりは、その全存在を他者に与えることであると、鶴のたとえを通して考察している。つまり、阿弥陀仏の住持の極まりは、その存在全体をもって衆生に至らんとする、本願力回向であることがうかがえる。

その具体的相は、第十、第十一で示される光明名号である。

如来浄華衆 如来浄華の衆は

正覚華化生 正覚の華より化生す

〈巻上〉

この二句は莊嚴眷属功德成就と名づく。

仏も何が故ぞ此の願を興したもうと。ある国土を見すに、あるいは胞血をもつて身器となす。あるいは糞尿をもつて生の元となす。あるいは槐棘かいきよくの高き圻きより猜狂の子を出す。あるいは豎子が婢腹より卓犖たくらくの才を出す。譏誚、これによって火を懐き、恥辱、縁としてもつて氷を抱く。このゆえに願じて言わく。我が国土には悉く如来浄花の中より生じて、眷属平等にして与奪、路なからしめん。

このゆえに、如来浄華衆、正覚華化生と言えり。

【解説】

仏はどうしてこの願いを興されたのかというと、高い家柄から小心がでたり、召使いとして働いている女性との間に卓越した才をもつた子供が生まれたりして、恥辱された思いをするの

である。だから願って我が国土では、すべての人々が如来の淨らかな花の中より生まれて、眷属はらからすべてが平等で差別がないようにしたいと願われたのである。

〈巻下〉

これ云何ぞ不思議なるや。凡そ是れ、雑生の世界には、若しは胎、若しは卵、若しは湿、若しは化、眷属そこぼく若干なり。苦楽万品なり。雑業を以ての故に。

彼の安楽国土は、是れ阿弥陀如来正覚浄花の化生する所に非ざること莫し。同一に念佛して別の道なきが故に、遠く通ずるに夫れ四海の内、皆兄弟と為る也。眷属無量なり。焉んぞ思議す可きや。

『宮城顛選集』参照

上巻においておさえられていることは、生まれ方、それから親子関係等において、我々が深く縛られていることへの悲しみというものをこの眷属功德のところでは表している。下巻では、「雑生の世界には、若しは胎、若しは卵、若しは湿、若しは化、眷属そこぼく若干なり」。「眷属若干」というのは、連帯できないという問題を表している。その言葉に対置して「夫れ四海之内、皆兄弟と為る也」という言葉が出されている。

◎そこを『教行信証』の上でみると、三ヶ所に見られる。(三ヶ

所に分けているのは何故だろうか。)

① 12-37 行巻

『論の註』に曰く、彼の安楽国土は、阿弥陀如来の正覚浄華之化生する所に非ざるは莫し。同一に念仏して別の道無きが故に、と。

② 12-120 証巻

「莊嚴眷属功德成就」とは、「偈」に「如来浄華衆 正覚華化生」  
言えるが故に。此れ云何ぞ不思議なるや・・彼の安楽国土は、  
是れ阿弥陀如来正覚浄華の化生する所に非ざるは莫し。同一に  
念仏して別の道なきが故に、遠く通ずるに夫れ四海の内皆兄弟  
と為すなり。眷属無量なり。焉ぞ思議すべきや、と。

③ 12-158 真土巻

『論』には「如来浄華衆 正覚華化生」と曰へり。  
又「同一念仏無別道故」と云へり。

◎「四海内皆兄弟」という名のりが「衆生」という名のりです。

『歎異抄』第五章にもこのことはつながる。

「一。親鸞は父母の孝養のためとて一遍にても念仏もうしたる  
こといまだ候わず」

第五章全体でおさえられていることは何かというと、念仏に  
おいてはじめて父母にあり、父母の恩もわかるのである。とこ  
の様に蓬茨祖運先生は『歎異抄』の本の中でおっしゃっています

すと宮城顛先生は述べられています。

眷属功德の内容としておさえられてあるものは、衆生として  
の目覚めということ。「四海之内皆兄弟」たる私ということへの  
目覚めである。

安楽浄土とは、すべての人を衆生として目覚めさせる力だ  
ということが一切の衆生をそのごとき眷属として生み出す、「四海  
之内皆兄弟」たるものとして目覚めさせるところに、浄  
土、国土というものはたらきがみられる。

以上

**感想**

「四海内皆兄弟」と言えない悲しき、この苦しき、このことを  
思わされる眷属功德のみ教えでした。

「人はみな一人では生きていけないものだから」、歌手の中村  
まさとしさんの「ふれあい」という歌が深く胸に響きます。

合掌

愛樂仏法味 禅三昧為食

この二句は莊嚴受用功德成就と名づく。仏本さんがゆえぞこの願を興したまへる。ある国土を見そなはずに、あるいは巢を探りて卵を破り、□饒の□となす。あるいは沙を懸けて□を指すをあひ慰むの方となす。ああ、諸子実に痛心すべし。このゆえに大悲の願を興したまへり。「願はくはわが国土、仏法をもつて、禅定をもつて、三昧をもつて食となして、永く他食の勞ひを絶たん」と。

「愛樂仏法味」とは、日月灯明仏、『法華経』を説きしに六十小劫なり。時会の聴者また一処に坐して六十小劫なるも食頃のごとしと謂ふ。一人としてもしは身、もしは心をして懈倦を生ずることあることとなし。

「禅定をもつて食となす」とは、いわく、もろもろの大菩薩はつねに三昧にありて他の食なし。「三昧」とは、かのもろもろの人天、もし食を須る時、百味の嘉肴羅列して前にあり。眼に色を見、鼻に香りを聞き、身に適悦を受けて自然に飽足す。訖已りぬれば化して去り、もし須あるにはまた現す。その事、『経』にあり。このゆえに「愛樂仏法味 禅三昧為食」といへり。

## 【語句】

- ・ □饒 (もうによう) 山盛りのごちそう
- ・ 食頃 (じぎきよう) 一度食事をするぐらいの時間
- ・ 懈倦 (けけん) だらけ、つかれること
- ・ 嘉肴 (かこう) おいしい料理

▽食 能く有情の身命を持して断壊せしめず

▽受用功德・・・浄土の生活において人は何を食して生きるか

受用とは法を納めて己にあるを「受」と名づけ、資けて己が事を成ずるを「用」と名づく。受用多しと雖も、食について受用の徳相を明す。この一偈、正覚華化生の者の受用するところを明す。

## 【穢土 所為の境】

○穢土の食 四食 有漏の命根を資する食

- ① 段食 (物質) ② 触食 ③ 思食 (希望) ④ 識食 (執持)
- (1) 殺生して食す 巢を探りて卵を破り、□饒のそなえとなす。
- (2) 非食を食となす 沙を懸けて□を指すをあひ慰むの方となす

## 【浄土 能為の願】

「願はくはわが国土、仏法をもつて、禅定をもつて、三昧をもつて食となして、永く他食の勞ひを絶たん」

○浄土の食 智慧命、法身を成就する食べ物

総 (観仏国土清浄味)

別 (撰受衆生大乘味・畢竟住持不虛味・類似起行願取仏土味)

「其国の衆生常に二食を以つてす。一者法喜食、二者禅悦食なり」

(1) 愛樂仏法味 教え (本願) を聞いて喜ぶ

(2) 禅三昧

「一の無為法身を証するを禅三昧となす。寂の所、即ち照にして法味を愛樂す。即ちその体、空慧にしてこれ法身の徳なり」

第十五 無諸難功德

永離身心悩 受樂常無間

この二句は莊嚴無諸難功德成就と名づく。仏本なんがゆえぞこの願を興したまへる。ある国土を見そなはずにあるいは朝には袞寵に預りて、夕には斧鉞に惶く。あるいは幼くしては蓬藜に捨てられ、長じては方丈を列ぬ。あるいは笳(あし笛)を鳴して道を出、麻(喪服)を歷經して催還す。かくのごとき等の種々の違奪あり。

このゆえに願じてのたまはく、「わが国土は安樂相續して畢竟じて間なからしめん」と。

「身悩」とは飢渴・寒熱・殺害等なり。「心悩」とは是非・得失・三毒等なり。このゆえに「永く身心の悩を離れ 樂を受くること常にして間なし」といへり。

【語句】

- ・袞寵(こんちよう)「袞」は天子のこと。天子の恩寵。
  - ・斧鉞(ふおつ) おのとまさかり、刑罰の道具。転じて重刑
  - ・蓬藜(ほうらい) よもぎとあかぎ。荒れ果てた草むら。貧しい家
  - ・方丈(ほうじょう) 建物
  - ・違奪(いだつ) ちぐはぐな行き違い
- 【所為の境〓穢土】
- ・初樂後苦 朝には袞寵に預りて、夕には斧鉞に惶く。  
(初めは天子の寵愛を受け、後に極刑に処せられる)
  - ・初苦後樂 幼くしては蓬藜に捨てられ、長じては方丈を列ぬ  
(貧しい家に育ち、長じては富者となり贅をつくす)

- ・快樂無常 笳を鳴して道を出、麻を歷經して催還す  
(出るときは盛大、還るときは悲痛)

【能為の願〓浄土】

「わが国土は安樂相續して畢竟じて間なからしめん」  
「安樂」とは身に危険なきを「安」といい、心に憂悩なきを「樂」という。

「身悩なし」

- ・飢渴 百味の嘉肴を見聞して飽足す。故に飢渴をはなれる
- ・寒熱 不寒不熱にして自然調和す
- ・殺害

「心悩なし」

- ・是非、得失は無明中の法執なり 見惑
- ・三毒は煩惱にして人執より起こる 思惑

【感想】

「かのもろもろの人天、もし食を須る時、百味の嘉肴羅列して前にあり」とあるがこの「百味の嘉肴」とは具体的には何をさすのだろうか。

浄土は「身の悩み」がないというが、生きて身を持つている以上、老病死を避けることはできない。それなのに、なぜ「安樂相續」というのだろうか。